郷土はんのう

第36号

高麗郡健郡1300年の証し
—常陸(ひたち)団で生産されたもの—
(飯能市、芦苅場・堂ノ根遺跡住居跡出土遺物)
平成28年3月飯能市文化財指定(写真・飯能市教育委員会提供)

目　次

◆会長退任あいさつ……坂口和子 2
◆新会長あいさつ……大野亮弘 2
◆役員名簿…… 2
◆表紙(堂ノ根遺跡一号住居跡出土物)……大野亮弘 2
◆飯能と中山氏……中藤栄岳 3
◆飯能ゆかりの文人平山蘆江……高蓙　等 4
◆城歩きのすすめ……中上敬一 5
◆笠間市の史跡を訪ねて……関根貴志 6
◆飯能郷土史研究会の活動…… 8
◆編集後記…… 8

「会長退任のご挨拶」

坂口 和子

昭和四八年(1973)十二月、飯能郷土史研究会が発会してすでに四三年の歳月を数えます。その間平成十一年(1999)3月前会長井上峰次氏のあとをお引き受けしてすでに十七年皆さまとともに当会を維持してまいりました。長い間の会員の皆様のご協力に深く感謝申しあげます。一つの会の発展のためには常に新しい風が必要であります。心機一転後任の大野亮弘氏に期するところ大であり、また会員各位にもご協力、ご支援をお願いする次第です。

『郷土はんのう』が会の研究発表誌として企画編集されたのが昭和五十三年(1978)で、その第一号をはじまりとして年に一度ではありますが着実に発行、足跡をのこしてまいりました。現在三六号を数えますが、そこには私たちの郷土の歴史がまた暮らしの数々が記録されていて次世代の方々に遺す意味は大きいのではないかと思います。社会情勢がめまぐるしく変化する年月に、郷土に向ける関心も次第にうすれ、また会員さんの高齢化と相まって会の存続も危ぶまれる昨今でありますがそれゆえにこそこの豊かな自然に恵まれ広く深い歴史を有する郷土を愛する想いは強くなってまいります。どのようなことであれ郷土に関する情報は積極的に収集し、記録し、保存していくのがこの会の責務であると考えます。現在会の活動としての講演会、定例会、見学会などを通して会員同志の交流が盛んになることが会の活性化につながるのではと思います。今後とも郷土への〝まなざし〟をより広く、より多く持っていただきたいと願っております。

長い間のご協力ありがとうございました。

「会長をお受けして」

大野 亮弘

飯能郷土史研究会は、郷土飯能の歴史文化について活発に活動されており、会長としての重責を感じております。

飯能地方は、古い歴史が多く残されており、近来にその歴史を伝えております。高齢化、少子化のこの頃、文化歴史の伝承が重要となっております。

会員の皆様のお力で、飯能市の文化歴史を掘り下げ、守り発展できればと思います。

今後とも、皆様のご協力と、活発なるご意見をお寄せいただきたく、よろしくお願い申しあげます。

役員名簿

(○印は新任)

顧問	井上 峰次
	○坂口 和子
会長	○大野 亮弘
副会長	内野 博司
	○小見山 進
	○清水 澄一
監事	塩野 繁
	○加藤 栄子
理事	加藤 義雄
	井上 晃
	浅見 賢治
	久下 文男
	○高澤 等
	○和田 強
事務局	堀越 喜代子
	浅見 初枝
	関根 貴志

堂ノ根遺跡一号住居跡出土物

飯能市芦苅場、南小畔川沿いにある住居跡から出土した土器208点の中の一点である。

霊亀2年(716)常陸国を含めた関東7か国から高麗人を移住させて高麗郡を設置した。

この遺跡の中に、建郡の時期の常陸産の土器が出土した。

常陸産土器の特徴は「胎土に雲母群を多量に含む個体と、長石粒を多量に含む個体があり、常陸国新治窯で生産されたものである」点である。

そして、この住居跡は大型であり、出土した須恵器や有台坏や有台坏の蓋である点から居住者が支配者階級層である可能性を示唆している。

古代高麗郡は、高麗郷と上総郷の2郷からなる小郷で、今日の日高市域が高麗郷、飯能市域が上総郷と考えられている。上総郷は、上総国からの移住者が多いことからつけられた名称とされ、常陸国南部の特徴を持つ土器の出土例が多いことも特筆される。このことにより、高麗郡建郡に係わる非常に重要な資料といえる。

飯能と中山氏

中藤 栄岳

中山氏の先祖をたどれば、寛政重修諸家譜第六五七巻に第二十八代宣化天皇より出、陽成院帝の時、丹治武信が関東に下り加治の地を開き、これを領すとある。今から千百年前の飯能の姿である。

これから丹党の活躍が始まり、やがて加治氏、中山氏と地名を氏名に変え地方の豪族から関東武士へと変遷を重ね、メジャーへと駆け上がっていったのである。

中山氏の活躍に焦点を絞れば、秀吉の小田原城攻め（一五九〇年）で、八王子城で北条氏方として加賀・上杉の大軍と応戦した中山家範の勇気と忠誠がその後の中山一族の四百年の基礎を作ったといっても過言ではない。

その結果、家範の子、兄照守は真田攻め大阪攻めで大功をたて、槍奉行・旗奉行を歴任し、六十五歳にて卒し能仁寺に葬られる。照守の孫にあたる直邦は黒田家に入り、柳沢保明公の知遇を得、寺社奉行・奏者番等を勤め、沼田城・比企高麗郡等三万石を領する。

一方、照守の弟信吉は十五歳で家康公の小姓となり、家康の絶大な信頼を得て、水戸頼房卿に付き家老となる。数々の功労を成し二万石を領す。歳六十五、卒して中山智観寺に葬る。因みに智観寺は丹治家の代々菩提寺である。

二代中山信正公は、初め小姓として秀忠公に仕え、家光公の上洛にも供をし、信頼厚く寛永五年信吉公に代わり水戸家の家老となる。

また、信正公は、水戸頼重公（頼房長男）が四国高松城に移る時、城受け取りの大役を務めている。

さて、この信正公と飯能の繋がりで特筆すべきは、中山に市をたて、経済活動を活発化したことであろう。毎月一と五の日が市の立つ日であり、地理的にみれば秩父／中山／江戸、高崎（中山道）／中山／八王子／鎌倉と街道の交差点で、物資が色々行き交ったと予想される。

取引された商品は、当時受取帳から推察すると　芋・小豆・栗・岡穂・大豆・あわ・そば等の作物。糠・野菜種・竹・しゅろ縄等原材料。ぞうり・筆・墨・紙・糸・げた・ふるい・線香等日常品など多岐にわたる。

もう一つ、文化的には、殿様が京へいったことから、京都の山車を見習って山鉾のような山車が中山の町を練ったことである。

当時は、幕府の直轄地で代官所があり。刑場もあった。また、黒田家の所領や旗本の所領もあり、人の往来はさぞにぎやかだったであろう。元禄のころは百数十軒もあった中山であるが、その後段々と衰退し市も途絶えるようになった。（戸籍関係文書）またこの頃で面白いのは、一戸あたりの家の寺と神社がそれぞれ決まっていて、この家は何寺の檀家で、信仰は何神社かが判ることである。（戸籍関係文書）

中山家の葬儀から

中山家の葬儀についてはほとんど知られていないが、数少ない資料から読み解いていくと当時の経済・交通・土木技術、飯能と江戸や他の地域との交流等、興味深い関係がおぼろげながら浮かび上がってくる。

一、墓の造り

中山家は水戸徳川家の家老であった関係から儒教を重んじた墓の造りを歴代にわたり踏襲している。いわゆる亀趺座形式つまり亀の背に墓石を載せる形式である。近くでは、池上本門寺の狩野家墓所が同形式である。

この亀趺座には林羅山の影響が顕著との説があり、この飯能の地にあるということは、この地に最新の文化がもたらされた証拠でもある。さらにこの材質は「三和土（たたき）」であり、石灰は名栗の名産で江戸時代は大量に運ばれたことから比較的簡単に手に入った。石は伊豆から船で江戸に運ばれ、刻まれて馬で飯能まで運んだものであろう。

二、墓の下部

亀座の下は更に石で囲み、粘土を頑丈に固め、つるはしも通らぬ厳重な壁となっている。火葬なら瓶に骨が入って収められるが、当時は土葬が主流で、池上本門寺でも座棺に納められ埋葬されているので、おそらく同じ葬送様式であろう。これ以上は調査をしていない。因みに座棺というのは、四角の縦長の箱に遺体を座らせて埋葬する格式の高い方法で智観寺でも昭和二十年代、私自身も目にした覚えがある。

そして墓所の上に四十九院というご廟所を建て、一周忌後に改めて亀趺座の石を組み墓の完成としたものらしい。

文政三年常光院様葬儀覚書によると四十九院とは、塔婆を四十九本四角に囲い屋根をつけて門・灯籠・玄関・番所等を造り、六両三分とある。（当時米百升で1両）その他、葬儀費用、職人費・飲食代・石材費・雑費等、莫大な出費となり中山家も大変だったろう。

三、黒田家と中山家と飯能

黒田家は千葉久留里の城主。能仁寺を菩提寺とし五十石をあたう。中山家は茨城高萩の松岡の城主であるが、家老職でご三家の中心にいたためほとんど江戸詰めであった。また、将軍とも近く多忙であったためあまり采地には帰れなかったともいわれている。

子供たちは、将軍の小姓としてまた書院番として仕えることが多く、これまた忙しい日を送ったようである。墓参は、代理の用人が毎年正月におとずれ、寺でもお礼を

江戸屋敷に届けたと記録にある。殿様がお出での時は「お天馬」と称し、所沢までお迎えにでたそうである。

いずれにしても殿様と地域住民の関係は深く共に親しい関係が江戸初期より明治まで三百年を越える長きにわたりつづいてきたといえよう。飯能はこうした為政者に平安の時代から約千年守られた幸せの土地であったと言えよう。

（智観寺住職）

飯能ゆかりの文人 平山蘆江

高澤　等

蘆江全集から

○平山蘆江という人物

昭和の初めから終戦直前まで、平山蘆江という文人が飯能と深い関わりを持った。関東大震災から太平洋戦争へと世が喧騒に震える時代に、その多くの時間を天覧山麓にあった東雲亭で過ごしている。

一般に都々逸作家として有名な蘆江だが、その作品は大衆小説、歴史小説、怪談、随筆、小唄、作詞、戯曲、映画原作、絵画などに及び、非常に多才であった。

飯能に関わる作品としては『飯能随筆』、『続飯能随筆』、『飯能戦争』があり、『女一人』も飯能が舞台として登場している。また『街歌しぐれ』に連載されていた「山小屋日記」は、東雲亭内での蘆江の実生活はもちろん、現在も営業を続けている「畑屋」や「こくや」など東雲亭の関係店、そして飯能町の人々も度々登場している。

蘆江は明治十五年、兵庫県神戸に生まれ、父田中正二死去後に長崎市の平山家（酒屋）に養子として入った。生い立ちも複雑であるが、成人から死去に至るまでも、その家族関係は複雑であった。

蘆江は若くして文学者を志し、義父を説き伏せ東京に出て与謝野鉄幹に私淑した。義父と断絶すると満州に渡り、帰国後に都新聞（現東京新聞）に入社する。記者時代は花柳演芸部門を担当したが、武蔵野鉄道が敷かれて般賑を極めた飯能町と蘆江が出会うことは必然だったのであろう。

○飯能の蘆江

蘆江の記憶では昭和二、三年頃から頻繁に飯能を訪れるようになり、しだいに東雲亭に投宿し、居心地が良くなり長逗留するようになった。そして昭和十年頃には仕事を持ち込むようになったと語っている。

蘆江が飯能に住むきっかけとなったのは、昭和十二年、東雲亭に逗留中に腎盂炎と膀胱炎を併発して倒れたことが発端のようだ。そのまま東雲亭で療養していたが、主人横川竹造の好意で敷地内の一屋を改造してもらい、蘆江は「山小屋」と名付けて自炊生活を始めることになる。蘆江が飯能に独居したのは、妻との不仲も一因であったろうと、孫の平山城児氏は語っている。

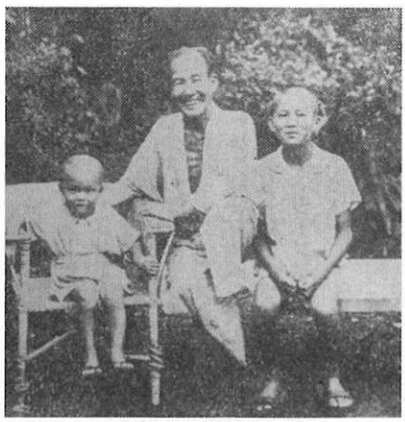
飯能町という田舎に移り住んだ蘆江であったが、世間は蘆江を放ってはおかなかった。「山小屋日記」を読むと少ない時でも週に二、三人、多い時には一日に複数の来客があり、その人々は歌舞伎役者から歌人、文人まで多岐にわたっている。そして『飯能随筆』を書くことになったのも、後に直木賞を受賞する瀧川駿の訪問と提案によるものであった。昭和十七年の正月には『飯能随筆』の出版記念会が東雲亭で開かれ、百数十人もの人々が集まっている。

○今も生きる蘆江作品

蘆江の作品として、代表作は『唐人船』という小説が挙げられる。それは蘆江の生家、田中家が幕末まで船御用を生業として活躍した長崎を舞台にした作品である。映画では『いろはにほへど』（松竹）、『西南戦争』（マキノ）などが代表作である。またレコード化された小唄などは数が知れないほどである。都々逸も数知れず、若き日に与謝野鉄幹、晶子夫妻に私淑した頃に作った短歌も幾つか遺されている。絵画についても名古屋のデパートで行われた展示会で完売したという記述があり、多くの作品を遺しているはずである。

しかし、ほとんどの蘆江作品はやがて人々の記憶から消えていったようである。ただし平成の時代になっても蘆江の怪談には根強いファンが存在し、平成六年に封切られた映画『怖がる人々』の中に蘆江の「火焔つつじ」（主演小林薫、黒木瞳）が収録されており、また近年も『蘆江怪談集』（ウェッジ文庫）が出版された。

○飯能が伝えるべき蘆江の記憶



東雲亭の蘆江と孫

蘆江は戦局が悪化した昭和十九年に東雲亭が陸軍に接収されたことで、大河原太子堂（八耳堂）の側の精進堂に移った。そして同年中に現在の新宿区荒木町にあった情人小林利子宅に移り住み、翌年には東京大空襲で焼け出されている。

晩年はラジオ番組にレギュラーで出演したり、エッセイなどを書いたりしていたが、昭和二十八年四月に七十二歳で逝去した。遺骨は長崎の晧臺寺にある田中・平山両家墓地に葬られ、東京都目黒区の五百羅漢寺境内にある平山蘆江歌碑の下に分骨が納められた。

蘆江が飯能に足を踏み入れた時から九〇年近く、飯能を去ってからもすでに七〇年近くの時が経ってしまった。蘆江が遺した作品の中でも『続飯能随筆』で描かれる東雲亭女中お静さんとの軽妙なやり取りは、今は空き地となってしまった東雲亭の敷地内で実際に繰り広げられた日常風景として活写されている。そこには今は絶えてしまった飯能町の七夕祭りや防空訓練などにも触れており、当時の雰囲気もさりげなく伝えてくれる。

お静さんは名栗川源流に近い白岩という土地の生まれで、後に「こくや」に嫁ぐが、わずか45日目に亡くなった女性である。悲報を受けた蘆江は横川竹造とともに降り積もった雪の中を「こくや」に駆けつけている。

蘆江やお静さん、その他蘆江に関わった人々の瞳を通して見た飯能の姿は、いまや大きく変貌しつつある。そして平山蘆江という文人のことも、現代の飯能人は一部の通人以外ほとんど知る人もいない時代となってしまった。

今、文人平山蘆江の才能を惜しみ、そして飯能との濃密な関わりを今一度掘り起こして、後世に伝えてゆきたいと切に願う次第である。

（会員・日本家紋研究会会長）

城歩きのすすめ

中上　敬一

はじめに

一口に「城」といえば、高い天守閣や櫓あるいは石垣があって、その周りを水堀で囲まれた場所と思われがちです。しかし江戸時代の天守閣がある城は全国でも12城しかありません。

現在の名古屋城や大阪城や熊本城は江戸時代の城ではありません。名古屋城は昭和20年の名古屋大空襲で焼失。現在の天守閣は昭和34年に外観を復元した城です。

豊臣秀吉が作った大阪城は大阪夏の陣で徳川家康に攻め落とされて焼失。家康は秀吉の建てた城郭の全てを破壊して、その上に秀吉の城より巨大な大阪城を建てたものです。現在の天守閣は徳川時代の土台に復興されたものです。

城づくりの名人と言われた加藤清正の熊本城は、大阪城、名古屋城と並ぶ日本三名城といわれます。しかし明治初期の西南戦争の舞台となり、熊本城に籠城した政府軍400人は、西郷隆盛率いる旧薩摩軍14,000人の攻撃をよく持ちこたえました。それは加藤清正が造った石垣と城内にある125の井戸のおかげといわれています。この戦争で天守閣や御殿などおおくの建物が焼失しましたが昭和35年に再建されました。焼失を免れた最初の天守閣といわれる宇土櫓は現在重要文化財に指定されています。清正は石垣づくりの名人といわれ、登ることは困難といわれる、反った高い石垣が特徴です。清正は家康の命令で名古屋城の築城にもかかわっていて、天守閣を造るときには周囲に幕を張って、石垣の石積み手法を見せなかったとの逸話があります。

城跡は日本全国に2万から5万か所あるといわれます。そのほとんどは戦国時代以前の山城です。そこで皆さんに山城の中を実際に歩いて見ることをお薦めします。本や写真ではわからないことが次々と発見できます。私がお薦めする城は八王子城です、飯能市からすぐにも行ける近場の城です。

1）八王子城跡　（東京都八王子市元八王子町三丁目）

①　電車で行く場合はJR高尾駅北口下車　①番バスのりばから霊園行→（5分）霊園前下車　→　徒歩20分　八王子城跡入口

②　土・日・祝のみ①バス乗り場から「八王子城跡」行が運行されています。

③　車で行く場合は中央線八王子ICの第2出口から甲州街道経由で約40分。八王子城入口前に駐車場があります。（無料）

注意　八王子城跡前には食堂、売店がありませんので、食料、飲料水は事前に購入して持参してください。休憩場。トイレ等はガイダンス施設を利用（無料）

注目　**八王子城の見学にはボランティアガイドを利用しましょう！！**

城跡管理棟にはガイドボランティアの方々が待機していますので、気軽に声を掛けてください。管理棟～大手門～大手道～曳き橋～増形虎口～四脚門礎石～鏑木門～御主殿跡のコースを解説しながら案内してくれます。無料です。

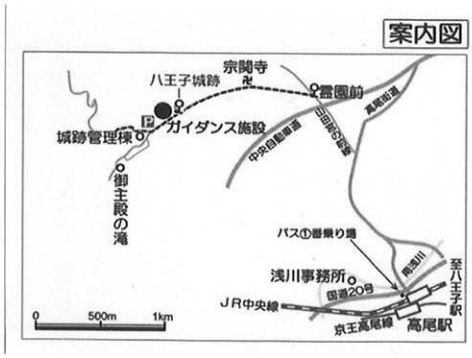
八王子城の見どころは石垣です！　後北条特有の「アゴ止め石垣」に注目！

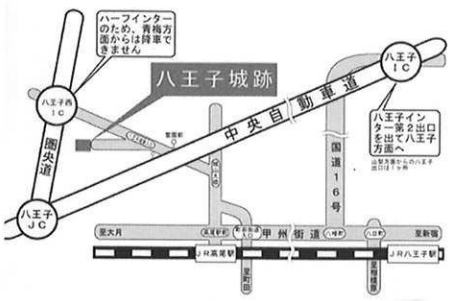
八王子城は後北条（小田原北条）の三代目北条氏康の三男、北条氏照が天正年間に築城した山城ですが、未完成の状態といわれています。天正18年豊臣秀吉の北条征伐で、八王子城は前田利家・上杉景勝（直江兼続）真田昌幸・信繁（幸村）親子等に攻められて一日で落城してしまいます。八王子城の落城が決め手となって小田原城は戦うことなく開城して、氏政・氏照兄弟は城下で切腹して北条氏は滅亡しま

した。

北条氏照が築いた八王子の山城は広大でその特徴は、累々と石垣が築かれている事です。特に柵門台や伝大天守や御主殿の後ろには巨大な石垣が築かれています。現在も山城のあちこちで石垣が発見されています。八王子城の石垣は全て最下段の石の上に少しずらして、次の石を積み上げるという工法を用いています。この特徴ある石垣の工法を「アゴ止め石垣」と呼んでいます。曳き橋から冠木門に至る石垣と石畳の道は圧巻です。ぜひ現地にいって実感してください。

（日本石仏協会理事）





アゴ止め石垣

曳き橋と４段石垣

枡形虎口（入口）

冠木門（御主殿入口）

笠間市の史跡を訪ねて

関根 貴志

今年のバス見学は茨城県の笠間市方面へ向かった。我々17名は例年のごとく豊栄観光のバスに乗車し、予定をやや遅れて飯能駅南口を7時40分に出発した。10時を少し過ぎたころ岩間ICを降り、10時半ごろ今回の旅行の案内人である、光野志のぶ先生と合流した。光野先生は岩間町史の編纂に参加されて以来、『岩間町の石仏・石塔』や『いわまの伝え話』の編纂にも中心人物として参加されており、また岩間歴史懇話会を主宰するなど、岩間地域の歴史については特に詳しい方である。

○愛宕神社

ややスケジュールが押しているため、バスはそのまま愛宕神社へ向かう。道はぐいぐいと一気に高度を上げてゆき、ほどなく山頂に近い駐車場へ出る。そこから本殿への参道が延びているが、広大な見晴らしが広がるため、足を止めざるをえない。この風景についてはまず昭和十年に発行された『岩間今昔誌』の郷土愛あふれる一文を引いてみたい。今も概ねこの通りであろう。

『岩間驛に下車し四方を見渡しても目に映ずる宏壮雄大な人工的な大建物はないが、驛より西方に巍然として聳え立つ大建築がある。これこそ東洋一の大建築と誇る丸ビルを百千合せても及ばぬであらう。この自然の大建築とは十三天狗を以て有名な愛宕山である。

山姿秀麗萬古の色をなし海抜千五十二尺、驛より約十町にして山麓に達す。山頂に火産霊神を祀る社宇がある。これを愛宕神社と稱し火防の祖である。霊験殊に著しきため信徒の登山するもの四季絶ゆるときはない。山上に到れば眺望豁然東は遠く太平洋を望み、南は常總の廣野を一眸に收め近くは霞湖の水鏡の如く目に映じ、石岡土浦水戸の市街脚下に集り砂塵をけつて飛ぶ自動車黒烟あげて走る汽車、右往左往のそのさまは活動寫眞を見るやうな感がある。行楽の士一日の休暇をこの山に登つて勝景を愛するのまた無の業であるまい。』

さて岩間の愛宕山といえば右の記載の通り天狗を以て聞こえており、篤胤の『仙境異聞』でも詳述されている。江戸期には常陸国内中から信仰を寄せられていたようである。

天狗といえば修験で、徳一開創の伝説があるように、筑波山・加波山に連なる系統の修験行場であったに違いない。加波山は当山の西方約10km、筑波山は南西約15kmの位置にある。飯能周辺の距離で表すと、例えば越生の龍穏寺と名栗の龍泉寺との直線距離は約10km

半、天覧山と竹寺の距離が約11㎞足らず、吾野駅と西武秩父駅では約16㎞弱であるから、そのぐらいの位置関係ということである。また『仙境異聞』では「岩間山に十三天狗、筑波山に三十六天狗、加波山に四十八天狗、日光山には数万の天狗といふなり」とあり、勢力差を暗示しているようである。

この山に愛宕神社を勧請したのは、この地を治めていた宍戸氏と見られている。愛宕権現は火伏の霊験のある神としての性格を持つが、勝軍地蔵の垂迹とされており、このため軍神として各地の武士から帰依されていたからである。江戸期以降、勝軍地蔵への信仰は主流から外れたが、時代が下って日露戦争で崇敬が復活したのではと光野先生は言われていた。

現代では火伏の神として尊崇を集めており、近辺の消防団が奉納した額等が境内のあちこちに見える。

奥の院本殿は鉄製の六角塔という珍しいものである。この本殿をコの字に囲むように十三個の石屋がある。これが岩間山の十三天狗の祠である。この天狗達については『仙境異聞』にも記述があり、もともとは五天狗だったものが次第に増え、最後に加わった長楽寺が首領となって十三天狗となった、というのが一般に知られた話であったらしい。

光野先生は、江戸期の本末制度と、その本寺の経済的な理由で十三天狗の伝説が流布されたのではないかと見ている。

○あたご天狗の森

愛宕神社から尾根伝いに「あたご天狗の森」へ向かう。しかしあいにく雨足が強さを増し、天狗が観ていたであろう景色を存分に味わうことは次の機会となった。

続けて「和旬魚菜　やま中」で昼食をいただく。ここは幹線道路から少し外れたところにある隠れ家的な店で、笠間の地元米を使ったりしており、人気があるという。ここに30分ほど滞在した後、笠間城址へ向かう。

○笠間城址

13時ごろ笠間城址に着いた。笠間県立自然公園として指定された区域の一角に位置している。広大な城址敷地内のすべてを周ることはできなかったが、いくつか興味深いものが残されている。

ひとつは笠間町立美術館跡で、建物はかつて明治天皇が行幸のした際に宿泊した西茨城第一高等小学校の旧校舎を改築したものであり、昭和二十五年に町づくりの一環として建てられたものである。

もうひとつは「笠間満州分村懐古之碑」である。これは世界恐慌や大陸進出という時代背景のもと、国策として満州移民が進められるなか、笠間町でも分村の機運が高まり町営事業として昭和十七年より実施されたものである。

百数十名が彼の地へ渡ったが、敗戦とソ連参戦のため、故郷の地を再び踏めた者は約三分の一であったという。

また、城址公園内には忠臣蔵の大石良雄の像が立っている。

これは大石家と笠間藩との関係に由来していて、良雄の曽祖父の良勝は大坂の陣の戦功で浅野家の筆頭家老となったが、浅野家は当時笠間藩の藩主であった。次代の良欽(良雄の祖父であり養父)も家老職を相続し、この代で赤穂への国替えが起きる。良雄が生まれたのはその後なので、良雄自身は笠間の地と直接の縁は無い。

○笠間稲荷

その後、城址から笠間稲荷まで徒歩で向かい、14時前頃到着する。ちょうど翌日から菊祭りが始まるということもあって、境内は多くの菊が飾られていた。

○塙家住宅

最後に15時半ごろ塙家住宅を訪問した。ここは代々名主を務めてきた旧家の古民家を国指定文化財として修理・保存しているもの。珍しいのは東日本にはあまり見られない分棟型という形式で建てられている点にある。当主に直々に案内していただいた。16時ごろ塙家を離れた。ここで光野先生とも別れた。

雨は強くなり、常磐道も外環道も渋滞気味であったため、飯能駅南口についたのは19時20分ごろになった。

天候に恵まれたとは言えない一日だった。次に訪問するときには晴れた日の絶景を眼にしてみたいと思う。

（会員）

笠間稲荷にて

表紙　発掘状況
（飯能市芦苅場）

飯能郷土史研究会の活動

◎平成二十七年度事業報告

▽総会
・四月十八日（土）
講演会
「飯能と中山氏」
講師　中藤栄岳氏
（智観寺住職）

▽例会
・六月二十日（土）
特別展「機屋の挑戦　明治から昭和へ、小槻工場物語」について
講師　村上達哉氏
（飯能市郷土館学芸員）

・八月二十二日（土）
「飯能ゆかりの文人・平山蘆江」
講師　髙澤等氏
（日本家紋研究会会長・郷土史研究会会員）

・十月十六日（金）
県外研修
「茨城県笠間市の史跡を訪ねて」
講師　光野志のぶ氏
（岩間歴史懇話会主宰）

・十月
特別展「武蔵野鉄道　開通」
郷土館事業に協賛

・十二月十九日（土）
「武蔵野鉄道開通１００周年と武蔵野三十三観音について」
講師　大野亮弘氏
（郷土史研究会副会長・竹寺住職）

・二月二十七日（土）
「城の基礎知識」
講師　中上敬一氏
（日本石仏協会理事）

・三月三十一日
郷土はんのう三十六号発行

◎平成二十八年度事業計画

▽総会
・四月十七日（日）
講演会
「飯能市の近代和風建築」について
講師　羽生修二氏
（東海大学名誉教授・飯能市文化財保護審議委員）

▽例会
・六月二十五日（土）
「飯能地方の〝うちおり〟と〝はたおり唄〟」
講師　石井英子氏
（飯能の〝みんよう〟保存会代表・郷土史研究会会員）

・八月二十七日（土）
「飯能諏訪八幡神社五百年祭を終えて」
講師　加藤義雄氏
（理事）

・十月十四日（金）
県外研修
「八王子城跡と周辺の見学」

・十月九日～十二月四日
特展
「高麗郡健郡一三〇〇年記念展」
郷土館事業に協賛

・十二月十七日（土）
「飯能の林業」（仮題）
講師　加藤衛拡氏
（筑波大学教授）

・二月十八日（土）
講師未定

・三月三十一日
郷土はんのう三十七号発行

編集後記

不順な天候が続きましたが、さくらの開花予報通り次々と各地は桜便り満載です。

世界情勢も国内情勢も腑に落ちない事ばかりですが、自然は正直に何の駆けひきもせず巡ってきてくれます。飯能の豊かな明け暮れに感謝です。

「郷土はんのう」第36号にご執筆の方々ありがとうございました。皆様のご寄稿をお待ちしております。

（坂口　和子）

訃報

尾島　敏夫氏
森田　道男氏
山岸　敬司氏

謹んでご冥福をお祈りいたします。

郷土はんのう　第三十六号
発行日　平成二十八年三月三十一日
発行所　飯能郷土史研究会
〒357-0034 埼玉県飯能市東町三一－六
電話九七三－三三八一（堀越方）
題字　大野亮弘
印刷所　（有）ビイ・ユースフル